



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4464 号 2018.6.27 発行

映画化 「こんな夜更けにバナナかよ」 障害者とボランティアの交流、葛藤 主演に大泉洋さん 道内ロケ進む /北海道 毎日新聞 2018年6月27日

難病で障害を抱えた札幌市在住の主人公と介助するボランティアの交流などを描いたノンフィクション「こんな夜更けにバナナかよ」の映画化が決まり、道内各地で撮影が進んでいる。主演は俳優の大泉洋さんで、今冬に全国公開される予定。

原作の主人公は、全身の筋肉が衰える難病「筋ジストロフィー」を発症し、車いすや人工呼吸器を使った24時間介護が必要になった鹿野靖明さん。自宅での自立した生活を選択し、2002年に42歳で亡くなった。

タイトルは、鹿野さんが深夜に大学生ボランティアを起こし、「腹が減ったからバナナ食う」と言い出したというエピソードから。原作では、介助者にとっては時にわがままとも思える振る舞いをする鹿野さんとボランティアが本音でぶつかり、向き合った。そんな両者の葛藤と苦悩の日々を描いている。

映画は鹿野さんを演じる大泉さんのほか、高畑充希さん、三浦春馬さんがキャスティングされた。監督は「ブタがいた教室」などの前田哲さん、脚本は「テルマエ・ロマエ2」などの橋本裕志さんで配給は松竹株式会社。

オール北海道ロケで7月上旬まで札幌や旭川方面などで撮影する。鹿野さんが実際に暮らしていた住宅などでも撮影が行われる。大泉さんは「どんなに『わがまま』を言っても周りから愛され続けた鹿野さんを、その理由を考えながら真摯（しんし）にコミカルに演じられたらと思っています」とコメントしている。【安達恒太郎】

生きることの意味実感して 原作者・渡辺さん

原作の著者は、ノンフィクションライターで札幌市在住の渡辺一史さん（50）。自身も約2年半、ボランティアとして鹿野さんを介助しながら取材を続け、講談社ノンフィクション賞と大宅壮一ノンフィクション賞をダブル受賞した。

渡辺さんは「鹿野さんは、どんなに重い障害があっても地域で普通に生きることを貫いた人だった」と話す。

夜中にバナナを食べることもその一つで、「一見わがままだと捉えられかねないが、動けない人にとっては当然の欲求。それにボランティアも気づき、人間的に成長していった」と強調。鹿野さんとボランティアの交流や葛藤を通して、人が生きることの意味を実感してほしいと願っている。

おり監禁、父親に猶予判決 「社会全体の支援不十分」 共同通信 2018年6月27日

兵庫県三田市の自宅でおりに長男（42）を閉じ込めたとして監禁罪に問われた無職、山崎喜胤被告（73）の判決公判が27日、神戸地裁であった。村川主和裁判官は「長男の尊厳を傷つけたが社会全体の支援体制も不十分だった」とし、懲役1年6月、執行猶予3年（求刑懲役1年6月）を言い渡した。

村川裁判官は判決理由で、重度の知的障害のある長男が跳びはねたり大声を上げたりし

たことから、木製のおりに監禁するようになったと認定。「施設に入所させるなど、他の手段を積極的に模索していない。長期間立ち上がることもできない狭いおりに監禁し、尊厳を著しくないがしろにした」と指摘した。

一方、被告が起訴内容を認め反省していることに加え「支援が必要な人々が尊厳ある生活を送るために地域社会が役割を果たすという自覚が全体に乏しく、支援体制の整備が十分でなかった」として執行猶予を付けた。

判決によると、山崎被告は妻と共謀して2013年4月28日～18年1月21日、ほぼ2日に1回、母屋で食事や入浴をさせる以外は、隣接するプレハブに置かれたおりに長男を入れ、南京錠で施錠して閉じ込めた。妻は1月末に病死。13年4月以前は監禁罪の公訴時効（5年）が成立している。

裁判は19日の初公判で即日結審。検察側は1992年ごろからおりの監禁が始まったと指摘したが、判決では全体の監禁期間の認定はなかった。弁護側は「適切な福祉サービスが受けられていなかった」と主張したが、市の対応の当否についても判示しなかった。

言い渡し中、傍聴した障害者団体の関係者らは、即日結審だったことを「審理が尽くされていない」と非難、執行猶予の結論に「障害者虐待を容認する判決だ」と憤るなど、庭内に怒号が飛び交った。

## 兄弟姉妹に障害、心情に気付いて 7月、富士の女性が体験を発表



静岡新聞 2018年6月27日  
きょうだい支援セミナーの打ち合わせをする沖侑香里さん（右）と田辺直美会長＝19日、富士市

親に甘えづらい寂しさ、家族の期待を背負うしんどさ…。兄弟姉妹に障害がある子が抱えがちな心情について、富士市の会社員で当事者の沖侑香里さん（28）が7月13日、市内で体験談を語る。同市の障害者の親の会が主催する。沖さんは「知らず知らずのうちに、親子の気持ちにすれ違いが生まれることもある。きょうだいの思いに気付くきっかけになれば」と、子の障害の種別や年齢を問わず、父母に参加を呼び掛けている。

沖さんは、5歳下の妹と2人姉妹。妹は進行性の病で、10代後半から寝たきりに。意思を伝えるのも難しくなった。母親は沖さんに「あなたはあなたの人生を歩んで」と背中を押す一方で、「いずれ家に戻って、妹の世話を手伝ってほしい」とも口にした。「親の葛藤も期待も理解できる。ただ、期待を重圧に感じてしまう子もいると知ってほしい」

祖父母を含めた6人家族だったが、母1人が妹の介護を担っていた。「家では私が太陽でいよう」と気負い、笑顔を絶やさないう努めた。2015年に母が病死。悩んだ末に当時勤めていた名古屋市の会社を辞め、地元の富士市に戻った。働きながら、妹の生活の場を確保したり、生活用品を届けたりと手助けをした。昨年7月、妹をみとった。

「同じような気持ちを抱えるきょうだいたちの力になりたい」。妹と母親が入っていた同市重症心身障害児（者）親の会はなみずきの田辺直美会長（56）に相談し、開催を企画した。いずれ県内で、きょうだいが集う会も開きたいと考えている。

田辺会長は「親はわが子全員に愛情を注ぎたいが、どうしても障害のある子に手が掛かる。きょうだいに我慢させてしまうことも多い」と話す。「親子で面と向かって気持ちを話す機会は意外と少ない。子育ての参考にしてもらえたら」と呼び掛けている。7月13日の「きょうだい支援セミナー」は同市のフィランセで午前10時～正午。資料代200円。同4日までに、専用サイト<<https://ws.formzu.net/fgen/S40280259>>から申し込む。問い合わせは田辺会長<電090（8471）8203>へ。

## 夢いっぱい工房 器や菓子、丹精込め 障害者ら尼崎で展示販売 /兵庫



毎日新聞 2018年6月27日

利用者や保護者らが商品を説明し、明るく接客する「夢いっぱい工房」＝兵庫県尼崎市杭瀬本町1の杭瀬中市場で、生野由佳撮影

尼崎市の杭瀬中市場（杭瀬本町1）の空き店舗で26日、「夢いっぱい工房」が始まった。近くにある障害者福祉施設「杭瀬福成園」（杭瀬本町3）に通う利用者約70人が手作りした品を展示販売している。

皿や箸置きなどの陶器、さをり織りの色鮮やかなショールやポーチ、パティシエの指導を受けて作った

焼き菓子などが並んでおり、陶器は丹精込めて作られた一点物が多い。50～3000円程度の手ごろな値段で、市場の買い物客らが足を止め、見入ったり、買ったりしていた。

家族会会長の沢田みちよさん（54）は「工房をきっかけに、地域の人たちに福成園を知ってもらい、障害のある子どもたちへの理解を深めてもらえたら」と話した。

工房は27日午前10時～午後6時、29日午前10時～午後4時半まで開かれる。問い合わせは杭瀬福成園（06・6481・9797）。【生野由佳】

## 障害者アートを観光名刺に 基山町「PICFA」利用者がスケッチ 特産のエミューも



【佐賀県】西日本新聞 2018年06月27日

基山町のオリジナル名刺のデザインのため、町特産のエミューをスケッチするPICFAの利用者

基山町宮浦のきやま鹿毛（かげ）病院内にある就労継続支援B型事業所「PICFA（ピクファ）」の利用者9人は21日、町と町観光協会から依頼されたオリジナル観光名刺用のデザイン画を作るために町内の観光地でスケッチした。

PICFAはダウン症などの障害がある人が通い、制作した原画やオリジナルグッズを販売して収入を得る施設。

昨年の開設以来、福岡市の商業施設で展示する作品を制作したり、町のパンフレットを入れる袋をデザインしたりしている。

観光振興を目指す町が、地元根ざした活動をしたというPICFAに名刺のデザイン画を依頼した。

この日、利用者は大興善寺や基肆（きい）城水門跡を訪問。同町小倉にある基山ファームでは、町が特産化を目指す大型鳥エミューをスケッチ。飼育場の中に入って間近に眺めながら「顔がかわいい」「目がきれいな色」などと歓声を上げながらペンを走らせた。

町と町観光協会は「基山ブランド名刺」として町内の観光地の写真が裏面に入る名刺の台紙を販売中。7月からは、PICFA利用者がデザインした新作が加わる予定で料金は両面印刷で50枚千円、100枚1800円。

## 施設巡回、笑いお届け ボランティア芸人が活躍中

神戸新聞 2018年6月27日

落語家の笑福亭学光さん（64）から芸を学び、「お笑い福祉士」の称号を受けたボランティア芸人らが、高齢者や障害者施設を回って笑いで元気を届けている。春光亭元気こと勇崎武彦さん（50）＝兵庫県西宮市＝もその一人で、阪神地域を中心に年間40カ所ほどを訪問。「1回1回が勝負。常に全力で笑わせに行ってます」とほほ笑む。（篠原拓真）

「ズズズ...」。学光さんが扇子を使って熱々のうどんを頬張る姿を演じると「うまい」と大きな拍手が起きた。6月中旬、障害者施設「姫路学園」＝姫路市＝の一室。学光さん



や勇崎さんら7人が落語や安来節を披露したり、太鼓や笛の音を響かせ、入所者らとともに阿波踊りを踊ったりした。

勇崎さんは6年前にお笑い福祉士として福祉施設を回り始めた。脳梗塞を患っていた父が8年前に他界。施設に入所し、訪問ボランティアの出し物を楽しそうに話す父の様子を



いつも見ていた。

演奏に合わせて阿波踊りを踊る施設利用者ら＝姫路市飾東町大釜

剣先でこまを回すお笑い福祉士のメンバー＝姫路市飾東町大釜

「母も父の介護

疲れで亡くなった。施設で楽しんでくれている人を見ると両親の姿と重なるんです。(活動を続けるのは)親孝行の代わりです」と目を細める。

お笑い福祉士は2004に笑福亭学光さんが創設した資格。学光さんが講師を務めるカルチャー教室などで学び、認定を受けると取得できる。養成講座は大阪や徳島、高松市のほか、県内では神戸新聞文化センター姫路KCCでも開講しており、これまでに計約450人が資格を取得した。取得者には、定年退職した男性や主婦など何か役に立ちたいと思う人が多いという。

「自分自身が笑顔になり、楽しめることも大きい」と魅力を語る勇崎さん。学光さんは「介護の現場は介護する側も大変。入所者以外に、働いている人たちにも元気になってもらえるように活動していきたい」と話した。



#### 東部の相談拠点撤退 静岡県発達障害者支援センター 静岡新聞 2018年6月27日

静岡県が本年度に入り、沼津市の東部総合庁舎内にある県発達障害者支援センター（東部）の機能を、本所に当たる静岡市駿河区の支援センターに引き揚げていたことが26日までに分かった。県の相談拠点が東部地域から事実上、撤退したことになる。発達障害者支援法が定める高い専門性を二つのセンターで提供することが困難になり、施設を集約せざるを得ないと判断したという。

支援センター（東部）は増加する東部地域の発達障害相談の受け皿として2012年に開設。当事者やその家族が直接、医師、心理士らと面談できる場所として重要な役割を担っていた。

今年4月以降、新規相談希望のうち面接が必要な場合は初回のみ職員が静岡市の本所から出張して対応するが、継続的な相談は原則として本所に来てもらうか、東部周辺の支援機関を案内している。

センターの業務は障害特性に応じた助言のほか、地域の関連機関との連携体制構築など多岐にわたる。利用者の年齢層は幅広く、求められる専門性は複雑化、高度化しているが、二つの支援センターは心理士や社会福祉士らの身分が県職員のため、数年単位で本庁や児童相談所などに異動し、「発達障害者支援の知識や経験を継続的に積むことが不可能」（関係者）という。

体制改善の必要性は支援センター（東部）の開設当初から指摘されていたが、二つの支援センターに、多方面に対応できる人材をそろえることは難しく、センター職員として経験の長い医師が両施設を行き来してサポートするフル稼働状態が続いていた。

関係者によると、都道府県設置の支援センターは社会福祉法人など民間に業務委託されるケースが多く、職員は当該分野を継続して担当するという。

【大阪北部地震】松井知事「2週間で義援金支給」実現は？ 号令先行、自治体負担も



産経新聞 2018年6月26日

18日、大阪府高槻市では、住宅から屋根瓦が崩れ落ちていた大阪府が、北部地震の被災者支援のために募っている義援金の早期支給を目指している。松井一郎知事は住宅の修理など生活再建を後押ししたいと「2週間程度での実現を」と意気込む。ただ通常は数カ月とされ、支給の実動部隊となる被災自治体に負担が掛からないか不安の声も漏れる。

「2カ月はだめ、2週間。片付けにもキャッシュがある」。松井氏は発生5日目の22日に開かれた府災害対策本部会議の後、記者団に強調した。

府や日赤などによる義援金の募集がこの日から始まっていた。一般的には、被災都道府県が外部委員を含む委員会を設置し、犠牲者遺族や重傷者、住宅被害といった配分対象や額などを決定し、市町村を通じて被災者に支給される。

今回は25日までに府内で7千棟を大きく上回る住宅被害を確認。義援金支給には建物被害を公的に示す罹災証明書の発行が必要で、通常なら被災自治体の職員が建物を調査した後、1～2週間かかる。住宅被害が多い高槻市や茨木市は写真を基に証明書発行を進める方式も導入、スピードアップを目指す。対象は軽微な被害に限られる。

早期支給を目指すことが調査担当の職員や窓口職員の負荷を高めるとの見方がある。府福祉総務課の担当者は「被災自治体に負担を掛けないようにしながら、事務手続きを簡略化するなど方法を検討したい」と話している。

一部損壊、義援金支給へ...低所得層などに5万円

読売新聞 2018年06月27日

◆国の支援と大阪府の義援金の配分案

	認定基準	国の支援	配分金額
全壊	目視で50%以上が損壊	最大300万円	5万円
半壊 (大規模半壊を含む)	20%以上～50%未満が損壊	最大250万円	5万円
一部損壊	20%未満	対象外	5万円※

※避難所で生活を送るひとり親世帯など

大阪府は、大阪北部地震の住宅被害で一部損壊となった被災者のうち、低所得世帯などに義援金から一律5万円を配ることを決めた。一部損壊は住宅被害の99.8%（26日現在）を占めており、手厚い支援が必要と判断、全半壊世帯と同額にした。

被災者生活再建支援法は、自然災害による住宅被害のうち、全壊には最大300万円、大規模半壊には同250万円を支給しているが、一部損壊は対象外だ。

今回の地震は一部損壊の割合が圧倒的に多いのが特徴。このため、府は▽障害者手帳を持つ家族がいる▽ひとり親▽市町村住民税が非課税——のいずれかに該当し、避難所生活を続ける世帯に義援金から見舞金として5万円を支給する。

ほかに、全半壊した世帯に5万円、死者の遺族には100万円を分配する。府は22日から義援金の受け付けを始めており、個人や企業から約1億円集まるめどがついたという。7月上旬から支給を始める。

一方、大阪府の松井一郎知事は26日、一部損壊の被災者で高齢や低所得などの事情があれば「みなし仮設住宅」への入居を特例で認める方針を明らかにした。災害救助法は全壊や大規模半壊しか認めていない。家賃の無償期間は全壊などの半分の1年とする。

## 障害者雇用のダイキンサンライズ、摂津市に新事務所棟

日本経済新聞 2018年6月26日

ダイキン工業は26日、障害者雇用の特例子会社、ダイキンサンライズ摂津（大阪府摂津市）の新しい事務所棟の竣工式を開いた。障害者雇用に2023年度に現在の約1.5倍の210人に増やす。ダイキンの雇用率は3月時点で2.28%。法定雇用率が21年に2.3%に引き上げられることに対応する。

約9億円を投じて新棟を建てた。事務所や食堂、倉庫を移し、既存の工場の作業スペースを広げた。ダイキン向けに空調機器の部品の組み立てなどを行っている。障害者の法定雇用率は18年4月に0.2ポイント上昇し、2.2%となった。ダイキンの井上礼之会長は「障害のある社員がやりがいを感じる会社になりたい」と話し、ダイキン本体も含めて障害者雇用に拡大していく。

## 野菜工場で障害者雇用・南陽 エヌ・デーソフトウェアの新事業

山形新聞 2018年06月27日



本社（写真奥）の近くにある倉庫。一部のスペースを活用して野菜工場を整備する＝南陽市和田

介護・福祉関連業務支援ソフト開発のエヌ・デーソフトウェア（南陽市、佐藤広志社長）が、新たに葉物野菜の水耕栽培に取り組む。既存の倉庫を改修して野菜工場を整備。障害者を中心に雇用し、早ければ本年度中の出荷を目指す。障害者の法定雇用率引き上げへ

対応のほか、定年退職者の再雇用時の働く場とする狙いもある。

同社は現在障害者を7人雇用しているが、4月からの法定雇用率の引き上げ後は規定より3人足りない状態となっている。掃除や書類整理などの業務を任せているが、現時点でこれ以上雇っても仕事がないという。今後のさらなる引き上げを踏まえ、県外での先進事例などを基に新たな事業を立ち上げることにした。

倉庫は平屋の鉄筋造りで広さは約160平方メートル。このうち、約70平方メートルを活用して完全密閉型水耕栽培プラントを整備する。光源は発光ダイオード（LED）を使い、断熱材で密閉した空間で室温、湿度をコンピューター制御して効率的に栽培する。6列で3～4段の棚を設置し、約1万4400株を育成。1日最大の収穫量は約570株（リーフレタスであれば約10キロ分）を想定する。東京の市場のほか、地元の飲食店などに販路を開拓する考え。

スタッフは7人で、このうち5人は障害者とする計画。プラント整備後、7月中旬以降に試験栽培を始めながら栽培マニュアル、スタッフ育成、マーケティングを踏まえた栽培野菜の品目選定を行う。野菜工場による3年目の売り上げ目標は約2千万円とした。

同社では障害者施設用の業務支援ソフトも開発しており、全国に顧客を持つ。水耕栽培はこうした顧客に同業の提案、ノウハウの提供にも生かせると考えている。同社では「業界の活性化にも貢献していきたい」と話している。

【障害者法定雇用率】従業員のうち障害者が占める割合。障害者雇用促進法では民間企業や国・自治体に一定割合以上の障害者を雇うよう義務付けている。4月1日の改正法施行で従業員45.5人以上の企業の場合は2.0%から2.2%になった。2020年度までにさらに0.1%引き上げられる。従業員100人超の場合は不足1人当たり月5万円の納付金を課される。一方、法定雇用率を超えて雇用している場合は、超過1人当たり月2万7千円の障害者雇用調整金が支給される。

障害者就職面接会 「フィル」大量解雇者対象 21人参加 倉敷 /岡山



毎日新聞 2018年6月27日

今年3月に閉鎖した就労継続支援A型事業所の運営会社「フィル」(倉敷市)に解雇された障害者対象の就職面接会が26日、同市本町の市民会館で開かれた。障害者21人が訪れ、新たな働き場所を求めて面接を受けた。

ハローワーク倉敷中央の主催。同市内を中心に一般事業所とA型事業所の計16事業所が参加し、約50人を募集した。

車の運転ができないという市内の30代男性は「フィルは送迎があったので就職した。送迎がなくても、公共交通機関で通える所があれば」と不安そうな表情を見せた。また、身体障害のある市内の女性(58)は「(昨年7月に閉鎖した)あじさいグループの事業所を解雇された後、再就職したフィルでも解雇された。安心して働けるA型事業所の制度にして」と涙を浮かべて訴えた。

岡山労働局によると、フィルに解雇された障害者は171人で、再就職が決まったのは11日現在で62人。A型事業所は助成金に頼らない経営を国から強く求められており、採用を望む人材と求職者とのミスマッチも起きているという。【小林一彦】

## きのこ会 「命の強さ」再会喜ぶ 原爆小頭症患者らが総会 / 広島

毎日新聞 2018年6月26日



「きのこ会」の総会で再会を喜び合う原爆小頭症の患者ら＝広島市東区で、山田尚弘撮影

妊娠早期の母親の胎内で浴びた原爆放射線の影響で頭が小さく、脳や体に複合的な障害を負って生まれた原爆小頭症患者と家族でつくる「きのこ会」の年に一度の総会が24日、東区の神田山荘で開かれた。患者7人とその兄弟や支援者らが集い、再会を喜び合った。

小頭症の兄の世話を続けている長岡義夫会長(69)＝安佐南区＝は「生まれた時に『20歳まで生きられない』と言われた皆さんが72歳を迎え、生命力の強さを感じる。8月6日の閃光を胎内で浴びた『一番若い被爆者』として、いつまでも元気でいてください」とあいさつ。患者たちは「(障害者)作業所の仕事が楽しい」「週3回、透析を受けている」などと近況を述べた。

厚生労働省によると原爆小頭症の認定者数は全国で18人(2017年3月現在)。うち15人がきのこ会に入っている。【田中博子】

## 発達障害の子に1対1授業 「通級指導教室」京都で新設進む

京都新聞 2018年6月27日

発達障害などで学習や生活上の支障がある小中学生を対象にした「通級指導教室」が京都市で増えている。本年度で計100校に達し、設置率は小中ともに全国平均の2倍を超える。今後もニーズの高まりが予想され、市教育委員会は「児童生徒に必要な支援ができるよう拡大していきたい」としている。

通級指導教室は言語障害や学習障害(LD)、注意欠陥多動性障害(ADHD)などの特性がある児童生徒が、通常の学級で学びながら通う。基本的に教員と1対1で、週数回の授業を行う。

市は1994年度から、言語や聴覚障害の「ことばときこえの教室」として始め、2006年度からはLDなど発達障害を対象とする教室を開いている。

本年度は小中の計8校で教室が新設され、小学校は80校、中学校は20校となった。昨年度の調査によると設置率は小学校45・7%(全国22・2%)、中学校23・3%(同8・5%)と高い。市教委は、94年度の開始当初から力を入れてきたことが全国平均を

上回っている要因とみている。

市内で教室に通う児童生徒は、最新の統計で1190人（昨年5月現在）。2013年から419人増えている。専門教員の配置が追いつかず、待機状態の児童生徒が出ているのが現状で、対応が急がれる。高校では本年度から全国的に導入されている。

市教委総合育成支援課は「重要課題として通級指導教室を増やしたい。教員の専門性を高め、幼稚園から高校まで切れ目のない支援をしていく」としている。

## 論説：ちひろ生誕100年 子どもに慈愛、平和を切望 福井新聞 2018年6月27日

絵本画家いわさきちひろの生誕100年記念「平和への願い」展が、越前市の「ちひろの生まれた家」記念館で開かれている。

鉛筆と薄墨のモノトーン。幼い瞳に深い悲しみ、うつろな心が映る。戦場の痛ましい場面でなく、柔らかい線で描かれた表情から戦争の無情さが伝わる。

広島の子どもの被爆体験を基にした「わたしがちいさかったときに」、ベトナム戦争をテーマにした「戦火のなかの子どもたち」などの絵本から、ピエゾグラフで再現した。

晩年に描いたこれらの作品には「世界中の子どもに平和と幸せを」という最も訴えたかった願いを込めた。通底するのは大切な人を慈しむ母の目線。ちひろの絵を見ると、心がきゅっとなるのはそのせいだろう。

ちひろは第1次世界大戦が終結した1918年の12月15日、雪で白く染まった武生の街に生まれた。20代で2度大陸に渡り、第2次大戦の戦況悪化とともに帰国。東京大空襲で焼夷（しょうい）弾の雨と炎の海を家族ばらばらに逃げ、家を失う。

長男松本猛さんの著書「いわさきちひろ 子どもへの愛に生きて」は、その時に目にした親とはぐれた子どもらが「ちひろの脳裏に焼き付いて離れることはなかった」と書いている。

同書は、ちひろの母文江が満州開拓民の伴侶、いわゆる「大陸の花嫁」を送り出す事業に携わり、その女性たちの指導者としてちひろが満州に渡ったことも詳しい。「花嫁」の多くは敗戦で現地に置き去りにされるなど過酷な運命をたどるが、このこともちひろが背負う十字架となった。

「戦火のなかの—」はベトナム戦争末期の72～73年、米軍による空爆が激しくなったころ制作した。沖縄から飛び立つ爆撃機に自らの体験を重ね、現地の子らに思いをはせた。

「戦場にいかなくても戦火のなかで子どもたちがどうしているのか（中略）よくわかるのです。こどもは、そのあどけないくちびるやその心までが、世界じゅうみんなおんなじだからなんです」と後書きにある。体調を崩しながら机に向かったちひろは、絵本が完成した1年後に他界した。

世界の紛争地では今も小さな命が失われ、国内でも虐待、貧困、いじめなど子どもに関する悲惨なニュースが後を絶たない。子どもの瞳から光を奪う現状をちひろはどう描くだろう。

記念館では年度末まで生誕展が企画され、街角でポストカード展も目にする。ちひろに触れる機会は増したが、市観光協会の担当者は「単年の一過性に終わらせたくない」と話す。生誕記念マークを「2018」とせず「1918」としたのもそんな思いからだ。

戦争を背景に、子どもの幸せな未来に向けた目線は先月亡くなった絵本作家加古里子（かこさとし）さんと通じる。生誕地が同じ2人の願いを、いま一度かみしめたい。

